

序

森田療法は、日本で産声をあげ日本で育つた精神療法である。それは単に神経質や神経症の治療法であるにとどまらず、人間が人間であることの本質に迫る。この精神療法の誕生の背景には、わが国の歴史的文化的な土壌があった。だが人間の本質には、歴史的変化や文化的差異があろうはずはない。時代を越え東西の文化の差を越えて、万人に通じる叡智が森田療法にはある。このような療法に対して、西洋からも徐々に関心が向けられ、それに呼応して、本療法の国際的な紹介が進められている。

フランスへの紹介は、一九五〇年代に高良武久教授がパリ大学でおこなった講演を嚆矢とし、その後諸家により、散発的な紹介がなされていった。そのような流れを受けて、一九八〇年代より、三人の精神科医師がフランスで持続的な紹介活動を開始した。森山成株博士（作家の帚木蓬生氏）、大西守博士、そして三番手が筆者である。

そのような活動はごく少数派のいとなみであつたから、わが国の森田療法の識者の方々の眼には、不透明に映つたことであろう。あるとき森田療法学会で、権威あるひとりの先生が、「フランスに紹介をしていると言うが、どんな紹介のしかたをしているのか」と疑問のお言葉を呈されたことがあつた。そんなご発言を頂門の一針と受けとめて、心を引き締めつつ日仏交流を続けて今日にいたる。交流の進展は、もちろん多くの人たちの尽力の成果であり、私の活動はそのほんの一部にすぎないことは言うまでもない。ただ私は、森田療法の原法の臨床に従事する立場からの紹介に、ささやかながら専従してきた。精力に欠けるので、交流はやや断続的であるが、約二十年間変わらぬ立脚点を維持している。その間に、講演、シンポジウムでの発表、雑誌論文など、フランスへ向けて公表しフ

ランス語で形を残している原稿が数篇ある。そこで仏文の稿とそれに対応する邦文の稿の各数篇をここに併載して、今日までの私自身の日仏交流の軌跡を、ひとつのかたちに集成してみたいと思う。

振り返ってみれば、この二十年余の間には、自分なりの模索が多くあり、進展も少しあつた。だから本書に収載された各章の間には、時差があり、内容は必ずしも繋がっていない。内容と言えば初期のものはとくに稚拙で、忸怩たる思いをしながら人目に晒すことになる。もちろんフランス人に伝わるように終始苦心をしており、結果として一部の章では、わかりやすく書こうとしたために平易に流れた嫌いもある。また最近になるほど、みずからのお扱いの原法を改めてみつめ直す視座に身を置くようになつたので、切り口や語り口が変化した。そのため多少のバラエティが生じている。

繰り返せば、各章はそれぞれで完結しており、連続性はない。またこれらはすべて、フランス人に理解してもらうように意図して書いたものである。つまりフランス人という名の森田療法の初心者を相手どつて書いた論集である。そのような意味では、森田療法に関心をお寄せになるわが国の諸賢に向けては、本書はオムニバス風の読みものになる性質のものである。

書名は、最終章のタイトルをそのまま生かして、『知られざる森田療法』とした。本療法の深い味わいを西洋人に伝えるいとなみは、なべて容易ではない。去る二〇〇四年に、フランス人の精神科医、精神分析家たちを、京都の三聖病院と東福寺に迎えて、日仏森田療法シンポジウムを開催する機会に恵まれた。そのような交流の実現は大きな前進であったが、来訪のお土産として、フランス人に森田療法の一片の核心をつかんで帰つてもらうことができたのかどうか。その心もとなさに押されて、もつと知つてほしいとの想いで草した一文が最終章の稿である。だが本来、森田療法は知性による理解を超えるものである。知的接近を棄て去るところにこそ、療法の真髓がお

のずから現出する。知ろうとする者には知るべくもない不可知性が、この療法の本質にあると言つてよい。そういう意味でも、森田療法は「知られざる」療法なのである。

答えは別のところにある。蘇東坡の詩に曰く、「廬山は烟雨、浙江は潮。未だ到らざれば千般恨み消せず。到り得帰り来たれば別事無し。」

ここに言う別事なしという体験こそが、知性を媒介としない格別の境地なのである。本書は、そんなことをフランス人に伝えたくて試行錯誤を重ねている一頭の牛の、足跡のような軌跡である。

目 次

序

I 森田療法と精神分析——パリにおける研究会議についての報告

一 はじめに (11)

二 発表稿 (12)

宇佐医師の手紙／藤繩教授の手紙／考察

三 討論と私見 (20)

II 精神療法における「主体」の問題——森田療法的立場からの発言

一 はじめに (24)

二 森田療法における主体の問題 (25)

三 あとがき (31)

III	<p>「メンタル・ヘルス」の彼岸での治癒——森田療法とあるがままの生活</p>
	付 メンタル・ヘルスとスピリチュアリティ (47)
	インターネットで伝えられる理論／あるがままの療法／ 拡大しつつある影響／訳者後記
IV	<p>森田療法に対するベルクソンの哲学の影響について</p>
	一 はじめに (51)
V	<p>二 森田理論とベルクソンの哲学——共通の含意 (53)</p>
	1 自然の法則と生命の秩序／2 生の欲望とエラン・ヴィタル／ 3 純な心とエラン・ダムール／4 精神と身体／5 時間と空間
VI	<p>三 メンタル・ヘルスへの道 (62)</p>
	1 純な心の歓迎／2 心の悪循環の打破／3 実生活での努力
VII	<p>四 結 び (65)</p>
VIII	<p>スピリチュアルないたみと森田療法</p>
	一 苦とスピリチュアルないたみ (69)
IX	<p>二 森田療法 (72)</p>
X	<p>三 注文の多い料理店 (76)</p>
XI	<p>四 明惠上人の病跡から (78)</p>

五 蓮とその孔 (83)

VI 森田療法の中にある禅仏教

一 京都におけるわれわれの交流体験 (85)

二 森田正馬と禅 (86)

1 森田正馬の生涯と仏教／2 神経質の療法の創案

三 禅と人間の自由 (89)

VII 知られざる森田療法

一 森田の「神経質」の概念 (92)

1 発端にある体质重視の考え方／2 精神病理学的機制／

3 一元論的視点

二 神経質と精神衰弱 (96)

三 入院の治療構造 (97)

四 森田療法と言葉 (99)

五 治癒とは何か (102)

六 西洋の叡智と森田療法 (104)

後記

京都の臨済宗の名刹、東福寺の旧山内に森田療法の専門施設、三聖病院がある。寺院の山門の外には、生活感あふれる下町が広がりを見せ、そこには庶民たちの京都があつて、まことに情緒のある界隈である。だがここにも都会の喧騒の波が押し寄せて久しい。その一画の手狭な敷地に、森田療法を原法のままで維持している古い病院が、ひつそりと、しかしたしかに生き残つて存在している。

森田正馬によるこの療法の確立をまるで待ち構えていたかのごとく、病院の母胎としての医院が創設されたのが一九二二年であるから、以来八十有余年の歴史がここに息づいている。病院の庭には木立があつて、毎年四季折々に、それぞれの木に花が咲き実がなつて幾星霜が過ぎた。木々は病院の歴史を見守つてきた無言の目撃者である。今日の人眼には、ここは一風変わった病院のように映る。だが変わったのは病院ではなく、外部の都会的環境の方ではなかろうか。目と鼻の先にある日本赤十字病院の屋上に発着する救急ヘリコプターの轟音がかまびすしい。

しかし三聖病院は、また別の意味でも神秘のベールに包まれているようだ。それには、禅的色彩を濃く出していいる病院の特色、その他いくつかの思いあたる理由がある。私は、そのベールが取り払われて、国内外で交流がよりオープンになることを願つてやまない者である。それは焦眉の課題だと思うが、ここではいささか余事である。

さて若き日のかつての私は、フランス精神医学への関心が先行していた。志に動かされてパリに学んだけれども、その体験はまさしく、「到り得帰り来たれば別事無し」であった。だが思ひがけない機縁もあるものである。パリの純粹フロイト派の精神分析家たちが、日本人の私をつかまえて、精神療法としての禅や森田療法の可能性を問う

たのである。森田療法への私の覚醒はここに始まる。二聖病院へUターンした私は、以来、この病院の不動の生き残りの姿の中に、時の流れを溯つて源にある本物をつかみたいという願望に取り憑かれている。実際には、教職にありつつ、三十年来病院に兼務しているので、期せずして私の姿勢は、関与しながらの観察者になつていて。それでもフランス人の問いかけに触発されて以来、森田療法の原法をフランスに伝えることは、私自身に課された使命となつた。この任務はまだまだ未完であり、本書は当面の折り返し点までの記録である。今後へ向けての責任を改めて痛感している。

以下、各章に関して若干の説明をつけ加えておきたい。第I章は、ピエール・マルティ (Pierre Marty) が主宰する心身医学研究所 (L'Institut de Psychosomatique) に学んだときに、私に鉢先が向いて研究集会が開かれた折の記録である。こゝで私はまだ森田療法についてほとんど紹介らしきことをなしえなかつたが、先述したとおりこれが日仏交流の原体験となつた。

ところでマルティは、フランスの精神分析第一グループの重鎮で、心身症者の心理機制の特徴として、「操作的思考」 "la pensée opératoire" という概念をつとに提唱していた人である。ちなみにアメリカで登場したアレキシシミアの概念には、そのマルティの考え方が摃り入れられている。マルティは、フロイトの「死の本能」の学説を受け継いで、その視点から心身症をとらえ、癌にその典型を見ていた。私の滞在時も、癌患者の精神分析に主力を注いでおり、当時の彼は学界で異端視されていたが、今にして思えば、精神分析の立場からのサイコオンコロジーの先駆者だつたに違いない。彼にとって癌患者の治療とは、精神分析によつて生きる力を引き出すことであつた。精神分析の父、フロイト自身も晩年に命尽きるまで癌と闘病した。その姿は宿痾を抱えた森田正馬の晩年に重なつて映る。私の未熟さゆえに精神分析と森田療法の関係について十分討論しきれなかつたことに、悔いを残している。

マルティも今は亡いが、心身医学研究所の方々と再討論する機会に恵まれたらと願っている。

第Ⅱ章でも大したことを語っていない。シンポジウムで、神経症者の自分探しのプロセスを十牛図に託して示したが、多くを説明せず余韻のみを残してしまった。しかし聴衆には、以心伝心で案外通じたような感触を記憶している。

第Ⅲ章は、近年の三聖病院の禅的森田療法を、いわば粗述したものである。十牛図におけるような「事実」のプロセスに代わって、自己意識と他者意識という心理学的概念が導入されている。さしあたりそれは、教える上の便法と受けとめておくのが妥当であろう。

後半の第Ⅳ、V章以降に、私自身の森田療法観が顔を出している。そのような意味で、このくだりのご一読を願い、ご叱正を乞いたい。

なお、第VI、VII章は、フランスの L'Harmattan 社から出版される予定の森田療法の本に向けて、寄稿済みの文である。フランスで出るこの本には、一〇〇四年四月に京都と東京で開催された日仏森田療法シンポジウムの成果を中心に、日仏双方からの複数の論文が収められる。L'Harmattan 社のその本と、北樹出版からの本書は、ほぼ時を同じくして刊行される見込みであり、同じ稿を日仏で発表する意義を認めて、それをご諒承下さった両出版社のご厚意に感謝している。

本書の仏文原稿は、まず自分で作文を起こし、その上でフランス人の知己やフランス語の先生の校正を経た。とくに一部の章では、藤平恵三先生、シルヴィ藤平先生ご夫妻のお力添えで、文章に彫琢が加えられた。それでも、如何ともし難い原文の拙さが随所に露呈している。禅については三聖病院で受けた薰陶に発し、最近は花園大学に学ぶ機会に恵まれ、前学長西村惠信先生（同大学禅文化研究所現所長）や安永祖堂先生（同大学教授）のお教えに触

発されるところが大きい。

森田療法というあまねくは知られていない精神療法についての出版に賛同し、しかも日仏両語で異例の構成をとるということだわりをも容認して、本書を世に送り出して下さった北樹出版編集主幹木村哲也氏、編集の労をおとり下さった古屋幾子氏に、心から謝意を表したい。なお本書中の挿絵や表紙の似顔絵は、佛教大学卒業生の新進の画家宍戸奈穂子様が線画のペンを振るつてくれたものである。

本書は、メンタルヘルス岡本記念財団の出版助成を受け、そのお蔭をもつて刊行された。
多くの皆様に感謝は尽きません。

二〇〇六年晚秋

岡本重慶